

## 自分の言いたいことを伝える力を高める自立活動の指導 ～発音の明瞭度を上げる学習活動の工夫を通して～

### 要約

学校教育では、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進が必要とされ、障害のある子どもと障害のない子どもが、できる限り同じ場で共に学ぶことを目指している。共に学ぶためには、人との関わりの中で自分の気持ちや考えを周りの人に伝え、コミュニケーションをとる力が必要となってくる。小学1年生のA児は、発音の明瞭度が低く話したことが伝わりにくいという課題を抱えている。そこで、自分の言いたいことを伝えるためのスキルを身に付けるための手立てが必要であり、このことは、人との円滑なコミュニケーション能力を育てる上からも意義深い。

また、A児の自立のために必要なことは、自分の言いたいことが相手に伝わる喜びを感じ、自ら伝えようとすることであり、そのために、発声・発語器官の動きを高め、正しい発音を習得することの意義は大きい。そこで本主題を設定した。

A児の障害の状態や発達段階等の実態から、優先的課題として、以下の3点を考えた。

- 相手に伝わりやすい発音で話すことができる。
- 伝え方が分かり、語彙を増やすことができる。
- 口や舌、顔の力を抜いたり入れたりして、口唇や舌の動きがスムーズにできる。

具体的な学習活動の工夫

つ か む	つくる・みがく	い か す
身体機能・口腔機能を高める	音韻意識を高め、語彙を増やす	コミュニケーション力を高める
<ul style="list-style-type: none"> <li>・舌のリラックス</li> <li>・息ふき遊び</li> <li>ソフト・ハードブローイング</li> <li>・口の体操 (顔・唇・舌)</li> <li>・粗大運動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模型を使用</li> <li>・口形模倣</li> <li>・音の弁別</li> <li>・単語→無意味</li> <li>音節→単語</li> <li>・聞き分け練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の読み聞かせ</li> <li>・言葉遊び</li> <li>・リズム打ち</li> <li>・動作化(まねっこ遊び)</li> <li>・絵、動作、言葉のマッチング</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごっこ遊び</li> <li>・SST</li> <li>・体験活動</li> <li>・ゲーム</li> </ul>

本研究を通して、次の成果(○)と課題(●)が明らかになった。

- 構音指導の継続は、舌や口唇の力が抜け、動きがスムーズになる上で有効であった。
- 「パ」や「カ」を目標音にして口の体操をしたことは、意欲的に繰り返し練習でき、聞き取りやすい発音に近づける上で有効であった。
- 1時間の中に、構音指導→言葉遊び→コミュニケーションを伴う言葉遊びを仕組んだことは、A児が繰り返し言葉を話し、楽しみながら語彙を増やす上で有効であった。
- 正しく発音できたかどうか子ども自身がチェックできるような評価の観点の工夫。
- 声を出しながら口唇の動きをまねるなど2つの動きを同時に行う協調動作。
- 正しく出るようになった音を定着させるための活動の工夫。

**キーワード**      発音の明瞭度      構音指導      言葉遊び

## 1 主題設定の理由

### (1) 社会的要請・特別支援教育の動向から

近年、時代の進展とともに特別支援教育を取り巻く状況は、大きく変化してきている。例えば、国内外における障害者施策進展、幼児児童生徒の障害の重度・重複化、発達障害を含む障害の多様化、教育、医療、福祉、労働等の関係機関が連携した支援の必要性などが挙げられる。このような状況の変化に適切に対応し、障害のある幼児児童生徒が自己の持つ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うことが求められている。

平成 22 年設置「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」を中心に、今後の我が国の特別支援教育の在り方等についての議論が進められ、平成 24 年 7 月報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進」としてまとめられた。学校教育では、障害のある子どもの自立と社会参加を目指した取り組みを含め、「共生社会」の形成に向けた、重要な役割を果たすことが求められている。そのためにも共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進が必要とされる。インクルーシブ教育システムの構築のためには、障害のある子どもと障害のない子どもが、できる限り同じ場で共に学ぶことを目指すべきべきであり、その場合にはそれぞれの子どもが、授業内容が分かり、学習に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けているかどうかを最も本質的な視点である、と述べられている。共に学ぶためには、人との関わりの中で自分の気持ちや考えを周りの人に伝え、コミュニケーションをとる力が必要となってくる。

### (2) 児童の実態から

小学 1 年生の A 児は、口唇を閉じるのが難しく、舌が短く下がり気味であるため、カ行がタ行になったり、子音を省略して母音だけになったりすることで、発音の明瞭度が低く、話したことが伝わりにくいという課題を抱えている。更に、絵画語彙検査（注 2）で語彙年齢が 4 歳位という結果から、生活年齢に比べて語彙が少ないという課題もある。

国語科「おむすびころりん」の学習では、「すっとんとん」の言葉のリズムの面白さ、「おおきなかぶ」の学習では、引っ張る人が増えていく面白さや「うんとこしょ、どっこいしょ」というかけ声の繰り返しに興味を持ち、擬態語や擬音語を楽しみながら言葉の意味を理解できている様子が見られ、繰り返し使う言葉や身近な言葉に関心があることが伺える。

また、ひらがなの言葉集めの学習に意欲的に取り組み、言葉で伝えられないことは、身振りや指差しなどで伝えようとする姿が見られ、周りの人に思いを伝えたいという気持ちが強くなってきている。集団には、積極的に関わろうとし、周囲の友達の言動をよく見てまねたり、指差しや身振りなどで伝えたりする。コミュニケーションがとれているように見えるが、自分が伝えたいことがうまく伝わらないため、伝えることをためらったり、支援を求めたりすることがある。そこで、自分の言いたいことを伝えるためのスキルを身に付けるための手立てが必要であり、このことは、人との円滑なコミュニケーション能力を育てる上からも意義深い。

### (3) 自立活動のねらいから

自立活動の目標は、「個々の児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身

の調和的発達を基盤を培う」ことにより、自立を目指すことを示したものである。ここでいう「自立」とは、児童生徒がそれぞれの障害の状態や発達の段階に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすることを意味している。このことは、A児にとって日常生活に必要な言葉を理解し、自分の言いたいことが相手に伝わる喜びを感じ、自ら伝えようとすることであり、そのために、発声・発語器官の動きを高め、正しい発音を習得することの意義は大きい。

## 2 主題の意味

### (1) 主題の意味

#### ① 言いたいことを伝える力とは

言いたいことを伝える力とは、自分の意思や感情などを相手に分かるように言葉で伝える力のことである。

#### ② 自分の言いたいことを伝える力を高めるとは

自分の言いたいことを伝える力を高めるとは、自分の意思や感情などを、相手に分かりやすい発音や言葉で、場や状況に応じて伝える力をつけることである。

### (2) 副主題の意味

#### ① 発音の明瞭度を上げるとは

発声・発語器官（口腔器官）の微細な動きやそれを調整する力を高め、正しい発音を習得させるようにするため、音を弁別したり、目標とする音に関連した構音操作（吹く、舌のリラックス等）をしたりして目標音につなげ、定着させることである。

#### ② 発音の明瞭度を上げる学習活動の工夫とは

##### ア 構音指導の工夫

A児が興味関心を持って意欲的に取り組める教材や教具を使い、構音指導の教材として、口唇の動き（上下・左右）を高めるもの、舌の動き（上下・左右・前後）を高めたり脱力したりできるものを、模型や絵カードを使って視覚的に分かりやすく、楽しみながらできる遊びやゲームを工夫することである。

##### イ 語彙を増やす活動の工夫

言葉遊びやゲームなどは繰り返しやリズム性のあるものが多く、親しみやすく、覚えやすい。また、楽しんでできるよさがある。このよさを生かし、言葉と絵や動きをマッチングさせることで語彙を増やすことができる活動のことである。

##### ウ 学習過程の工夫

A児の興味関心や実態に合わせて、指導の方法や教材・教具を工夫し、楽しく活動できる構音指導と絵と言葉や行動を結びつけながら、話したり語彙を増やしたりできる活動を1時間の学習活動の中に位置付けることで、発音の明瞭度を上げ、語彙を増やし、自分の言いたいことを伝える力を高めていく。

## めざす子どもの姿

進んでコミュニケーションをとり、自分の言いたいことを言葉で伝えようとする子ども

### 3 研究の目標

自立活動において、A 児の実態に応じ、発音の明瞭度を上げて語彙を増やす手だてや工夫を行い、自分の言いたいことを言葉でわかりやすく伝える効果的な学習の在り方を探る。

### 4 研究の仮説

自立活動において、次のような学習活動の工夫を行えば、A 児は積極的に自分の言いたいことを相手に伝え、伝わる楽しさを感じることができるようになるであろう。

- (1) 構音指導の工夫
- (2) 語彙を増やす活動の工夫
- (3) 楽しく活動できる学習過程の工夫

### 5 研究の具体的構想

- (1) 対象児童の実態（対象児童 A 児…小学 1 年生）

障害の状態	・口唇や舌の先を使う音が不明瞭で、言語の理解や表出が少ない。 ・離席や逸脱、勝ち負けへのこだわりがある。好きなこと、興味がある活動の終了や切り替えの困難さがある。
興味・感心	・身体を動かすこと（サッカー、鬼遊び、遊具遊び）を好む。 ・戦隊ごっこや妖怪ウォッチが好きである。
身体・口腔機能	・舌が短い・舌が下がりぎみで、上下左右に動かすことが不器用。 ・口唇の動きの硬さがある。舌に力が入り、脱力しにくい。
構音の様子	・置換…カ行→タ行、脱落…ウサギ→ナギ ・子音の省略…ポケット→オケット、カニ→アニ ・唇が離れ、「パ」など唇を閉じてからの発音が出にくい。
会話明瞭度	・フリートークで、聞き手が話題を知っていれば伝えたいことがわかることもある。
集団での様子	・周囲の様子や活動をよく見、まねて活動する。興味のある活動をしていると切り替えや注意・指示の受け入れの困難さが見られる。

A 児の障害の状態や発達段階等の実態から、優先的課題として、以下の 3 点を考えた。

- 相手に伝わりやすい発音で話すことができる。
- 伝え方が分かり、語彙を増やすことができる。
- 口や舌、顔の力を抜いたり入れたりして、口唇や舌の動きがスムーズにできる。

- (2) 検証の内容と方法

- ① 構音指導の工夫

- 口の体操、舌のリラックス、息ふき遊びを行う。

- ② 語彙を増やす活動の工夫

- いろいろな言葉遊びや読み聞かせを行う。

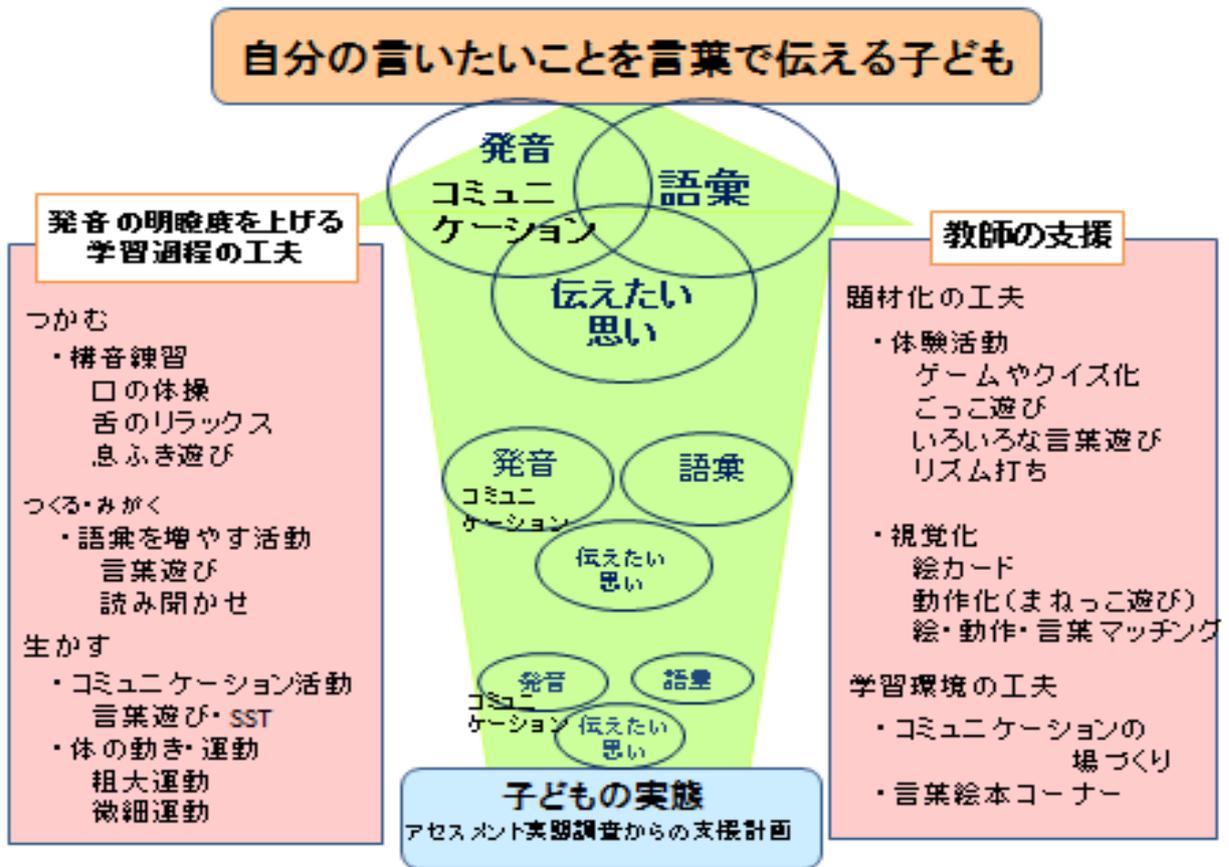
- ③ 楽しく活動できる学習過程の工夫

- 体の動きや運動を取り入れた言葉遊びやゲームなどのコミュニケーション活動

(3) 具体的な学習活動の工夫

つかむ		つくる・みがく	生かす
身体機能・口腔機能を高める	構音指導	音韻意識を高め、語彙を増やす	コミュニケーション力を高める
<ul style="list-style-type: none"> <li>舌のリラックス</li> <li>息ふき遊び</li> </ul> ソフト・ハードブローイング	<ul style="list-style-type: none"> <li>模型を使用</li> <li>口形模倣</li> <li>音の弁別</li> <li>単語→無意味音節→単語</li> <li>聞き分け練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵本の読み聞かせ</li> <li>言葉遊び</li> <li>リズム打ち</li> <li>動作化（まねっこ遊び）</li> <li>絵、動作、言葉のマッチング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ごっこ遊び</li> <li>SST</li> </ul> （こんなときどうする） <ul style="list-style-type: none"> <li>体験活動</li> <li>ゲーム</li> </ul>

6 研究の構想図



7 研究の計画

月	研究内容	月	研究内容
5月	研究主題の設定、研究計画審議	10月	仮説の見直し、検証授業計画
6月	実態調査	11月	検証授業（実践2）と分析・まとめ
7月	実態調査の結果分析、理論研究、	12月	研究のまとめ、報告書作成
8月	研究構想審議、検証授業計画	1月	報告書作成と審議
9月	検証授業（実践1）と分析・まとめ	2月	研究報告

## 8 研究の実際

### (1) 検証授業Ⅰ（9月末実施）

題材「パピプペポ」すごろくあそびをしよう

目標

- リズム打ちしながら、音の数を意識し、擬態語、擬音語を使った言葉遊びを楽しむことができる。
- 言葉と動きや物を結びつけて話すことができる。
- 唇をつけてから「パ」を発音する口の体操、口形や動きの模倣をしながら、口形や舌の位置に気を付けて発音することができる。

#### ① つかむ段階

この段階では、唇をつけてから「パ」を発音する口の体操、口形や動きの模倣をしながら、口形や舌の位置に気を付けて発音することがねらいである。

まず、「あ、い、う、え、お、ん」の口の形と舌や唇を大きく動かす口の体操を行い、唇の形を意識することができた。その後、息を強く出す練習として、A児が選択したへびの息だし、風車回しを行った。（写真1参照）さらに「ん」のつくパンの名前（アンパン、メロンパンなど）をリズムに合わせ、「ん」で唇を閉じてパンの歌を歌うことができた。最後に、唇をつけて発音することをより意識させるために、「ア、パ、イ、パ、ウ、パ、エ、パ、オ、パ」の無意味音節の練習を、教師の手本の唇の動きを見ながら模倣することができた。

<考察>

「パ」の発音をさせるときに、口の形を身体で覚えるために、A児が唇を閉じて発音できていた「ん」のつくパンの歌を繰り返し練習したことは、無理なく「パ」を唇をつけて出す上で有効であった。（写真2参照）

#### ② つくる・みがく段階

この段階では3つの言葉遊びをしながら、リズム打ちして言葉の音の数を理解し、言葉ともものを結びつけて、言葉の中の「パピプペポ」の音を意識してどの音を唇をつけるのかが分かることがねらいである。

まず、「パン」と「カン」の聞き分けを行った。「パン」と言うとすぐにパンの絵カードを取ることができた。「ラッパ」と「ラッコ」も「ラッパ」といった言葉の絵カードを取ることができた。次に、絵本「ぼたぼたとぷん」の読み聞かせをした。聞きながら、水の音の擬音語を一緒に話し、「ポタポタ」「パラパラ」など模倣して発音することができた。絵カードと言葉カードのマッチングでは、リズム打ちしながら「ハッパ」



【写真1 へびの息だし】



【写真2 パンの歌を歌うA児】



【写真3 絵カードとりをするA児】

「シッポ」「ホッペ」の絵カードを取り、「パ」や「ペ」を唇をつけて言うことができた。（写真3参照）「コップ」は絵カードを取ることにはできたが、「プ」の音が唇が離れ、「フウ」と

なり、「スープ」は絵カードがどれ分からず、裏の文字を見ながら探し、「プ」が唇が離れ「フゥ」となった。

<考察>

絵カードと言葉カードのマッチングでは、言葉の音の数に合わせてリズム打ちしたことは、音の数を意識する上で有効であった。擬態語や擬音語の絵本の読み聞かせは、模倣して言うことで楽しく取り組むことができ、絵と言葉を結びつける上で有効であった。言葉を聞いての絵カード取りでは、絵と言葉が結びついていない言葉もあり、「ん？」と顔を見て尋ねる反応がみられ、課題が残った。また、絵カードを探して取ることに意識がいき、「パ行」の音や口の形を意識できていないものがあり、唇をつけた「パ行」の口の形の意識づけ方、正しく発音できたかどうかの評価のあり方に課題があった。

### ③ 生かす段階

この段階では、「パ行」の言葉を唇をつけて発音し、音の数だけ進みながら、楽しくすごろく遊びをすることがねらいである。

絵カードから1枚選び、読みながら自分がすごろくのコマになって進んだ。ぴったりゴールできるように、輪の数と絵カードの裏に書かれた文字の数を見ながら取るカードを決める姿が見られた。その後、A児の好きなようかいカードを引き、名前をカードに書いていった。無事にゴールでき、満足そうにしていた。最後に「できたよカード」で振り返りを行った。口を大きく動かす、言葉の数進む、「パ」を大きな声で言う、ようかいの名前を書くという4つの項目を、よくできた絵のマークに丸をつけた。そして、聞いてもらうカードとして「スープ」と「プライどん」を選び、カードの言葉を先生に話して聞かせた。

<考察>

動きながら進むすごろくにすることは、自分がコマになって進むことで、音の数を意識し楽しんで活動する上で有効であった。(写真4参照)音の数だけ進む活動で音韻を意識することが出来たが、ようかいカードをもらうことに夢中になり、「パ行」の言葉を唇をつけて言うことを意識させることが充分ではなく、唇をつけて正しく発音できたのか評価の仕方に課題が残った。



【写真4 すごろくをするA児】

## (2) 検証授業Ⅱ (11月末実施)

題材「カ」のつくことばかるたあそびをしよう

目標

- しりとりやさかさ言葉などの言葉遊びをしながら、音の順序を意識して言葉遊びを楽しむことができる。
- 相手の言葉を聞き、音を弁別してカードを取ったり、言葉で答えたりすることができる。
- 「カ」を取り入れた口の体操、口形や動きの模倣をしながら、口形や舌の位置に気をつけて発音したり、言葉が相手に伝わるように、口唇や舌を動かして読んだりすることができる。

### ① つかむ段階

この段階では、「カ」を取り入れた口の体操、口形や動きの模倣をしながら、口形や舌の位置に気をつけてから発音することがねらいである。

まず、口形や舌の動きを模倣しながら口の体操を行うことができた。カラスのお面をつけてカラスになりきり、舌の奥を上げることができるよう、舌の真ん中を抑えながら発音し、「カア」と聞き取りやすい音を出すことができた。ガラガラうがいは、喉の奥を使い「ガラガラ」と音を出しながらすることができた。

<考察>

お面をつけてカラスになりきり、舌の奥を上げることができるよう押さえて発音するようになったことは、舌の奥を意識して挙げ「カ」の音を出すのに有効であった。

### ② つくる・みがく段階

この段階では、さかさ言葉やしりとりをしながら、音の順序を意識して言葉遊びを楽しむことで、音韻意識を高め、語彙を増やすことがねらいである。

さかさ言葉あてっこでは、2つ置いた輪の中にひらがなカードを1枚ずつ置き、話す順番に動き、話した言葉の絵カードを取った。「こ」「ま」、「か」「さ」など一音ずつ動くことで音を意識することができていた。(写真5参照)絵カードしりとりでは、しりとりの目標数を決めて行った。決めた数のしりとりが続くよう、最後の言葉と次の初めの言葉を確認しながら言ったり、絵カードの裏に書かれたひらがなを見て確認したりしながらすることができた。自分で決めためあての10枚ができ、満足そうにしていた。



【写真5

言葉に合わせて動くA児】

<考察>

輪の中に1文字ずつ入れて音を意識してさかさ言葉あてっこをしたことは、音の順序を意識する上で有効であった。また、A児自身があっているかどうか確かめることが出来るように、絵カードの裏に言葉を書いたことは、しりとりを自分の力で続け、意欲を持たせるために有効であった。(写真6参照)「カ」の音を意識できるように、「か」の文字にシールを貼ったことで、「か」をからすの



【写真6 しりとりの続きを考えるA児】

まねをして意識しながら発音しようとする姿が見られ、概ね有効であった。(写真7参照)

### ③ 生かす段階

この段階では、かるた遊びをしながら、聞いた音を弁別してカードを取ったり、目標音の「カ」の音をからすのまねをして発音したりしながら、楽しんで繰り返し発音することがねらいである。



さかさ言葉としりとりで使った絵カードを使って、言葉かるた遊びを行った。A児が楽しんでできるように、取ったカードをビンゴゲームシートの指定された言葉カードのところに置いていった。取ったカードの文字を読み、言葉カードとビンゴシートのカードを見比べながら言葉カードを置いていくことができた。(写真8参照)ビンゴになるとサッカーシールをもらうことで意欲を持続することができた。最後に、「きいてよカード」を使って評価活動を位置付け、先生に聞いてもらいたいカードを選び、舌

【写真7 シールを貼った絵カード】

の位置を意識して「カ」の音を出すことができた。

<考察>

さかさ言葉としりとりで使った絵カードを使って言葉かるた遊びをしたことで、楽しみながら何回も繰り返して「カ」のつく言葉を発音することができ、聞きとりやすい「カ」の音を出す上で概ね有効であった。ビンゴゲーム形式で音の数や順序を指定しておくことで、言葉カードとビンゴカードの文字数と音の位置を見比べながら考えることができ、音の順序を意識する上で有効であった。また、ビンゴゲーム形式にしてビンゴになるとサッカーシールをもらうことができるようにしたことで、一人でも最後まで活動を持

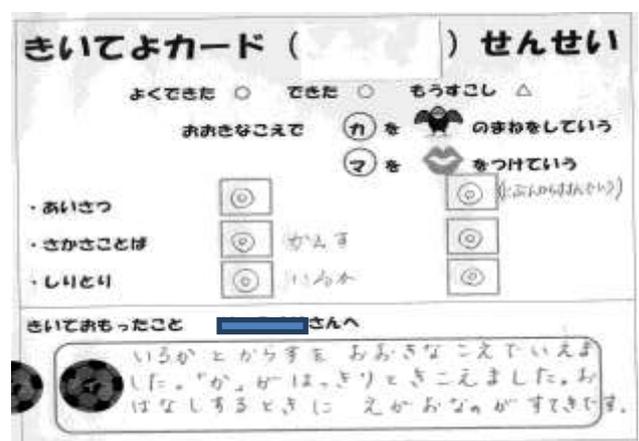


【写真8 カードと言葉を見比べるA児】

続けることができ、意欲的に楽しく言葉かるたをする上で有効であった。「できたよカード」で自分の活動を振り返ったことで、自分の頑張りを視覚的にとらえることができ、満足感を味わい、意欲的な活動につながった。また、「きいてよカード」で他の先生に聞いてもらい、できたことを認められたりほめられたりしたことで、言えたできたという自信をもち、次の活動への意欲となった。(資料1、2参照)



【資料1 できたよカード】



【資料2 きいてよカード】

## 9 全体考察

(1) 発音指導の工夫

構音検査(注3)から分析すると、パ行については、「パンダ」は、アンニャ→パンダと正確に発音することができた。ラッパは、アッパ→ダッパ、バスはバチュ→バツとなり、舌の動きが出てきて、

舌先をあげることが出来るようになった。このことから、口の体操の結果、舌の緊張が少しとれ、唇の動きがスムーズにできるようになってきたといえる。

スイカは、スイタ→スイカ、カニは、アニ→カニとなり、弱くではあるが「カ」が出る

音	言葉	6月	12月	正確さ	舌の位置・唇の動き
パ	パンダ	アンニャ	パンダ	○	唇が閉じている
	ラッパ	アッパ	ダッパ	×	舌に動きが出てきた
	バス	バチュ	バツ	×	舌が挙がってきた
カ	スイカ	スイタ	スイカ	△	舌の奥が挙がって弱くで
	カニ	アニ	カニ	△	はあるが「カ」が出た
ガ	ガム	アニユ	ガヌ	×	舌の奥が上がった
脱落	ウサギ	ナギ	ウアギ	×	脱落していた音が出た

【資料3 構音検査の結果】

ようになってきた。ガムは、アム→ガヌとなり、舌の奥が上がってきている。「ウ」の音が脱落していたウサギは、ナギ→ウアギと発音できた。言葉としては正確には言えていないが、口の中で舌の動きが分かる言葉になってきている。(資料3参照)

会話明瞭度は、フリートークで、聞き手が話題を知っていれば伝えたいことがわかることが増え、以前より聞き取りやすくなった。

類似運動検査(注3)は、舌や唇を軽く閉じて言う「k」の音が、奥舌を上げて「ンガァ」が出るようになった。舌や歯での破裂音は一語ずつ意識するとできるが、単語になるとできなくなり、舌や唇の使い方の意識づけに課題が残った。

## (2) 語彙を増やす活動の工夫

絵画語彙検査(注2)の語彙年齢が学習前4歳位から学習後6歳5か月となり、語彙の獲得の伸びが見られた。言葉遊びをしながら多くの言葉に触れ、言葉でのやりとりや会話を重視してきたことは、語彙を増やし言いたいことを伝える力を高める上で有効であった。

言葉遊びの活動の中で、絵カードと言葉カードのマッチングを繰り返し行ったことで、回数を重ねるごとにマッチングできるカードが増え、語彙力が上がった。

## (3) 楽しく活動できる学習過程の工夫

1時間の中に構音指導を位置付けて正しい構音の仕方を練習し、言葉遊びをしながら繰り返し発音し、楽しくできる言葉遊びをしたことで、1時間毎に聞いて取ることができる言葉カードが増え、言葉と絵をマッチングでき、語彙を増やす上で有効であった。

言葉遊びとゲームを組み合わせて学習に位置付けることで、最後まで意欲を持続して活動を行うことが出来た。

# 10 研究の成果と課題

## (1) 研究の成果

- 構音指導の継続は、舌や口唇の力が抜け、動きがスムーズになる上で有効であった。
- 「パ」や「カ」を目標音にして口の体操をしたことは、意欲的に繰り返し練習でき、聞き取りやすい発音に近づける上で有効であった。
- 1時間の中に、構音指導→言葉遊び→コミュニケーションを伴う言葉遊びを仕組んだことは、A児が繰り返し言葉を話し、楽しんで語彙を増やす上で有効であった。

## (2) 研究の課題

- 正しく発音できたかどうか子ども自身がチェックできるような評価の観点の工夫。
- 声を出しながら口唇の動きをまねるなど2つの動きを同時に行う協調動作。
- 正しく出るようになった音を定着させるための活動の工夫。

〈参考文献〉

文部科学省 「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」

山崎祥子著 「子どもの発音とことばのハンドブック」 芽ばえ社

中川信子著 「ことばをはぐくむ 発達の遅れのある子どもたちのために」 ぶどう社

注1 構音…咽頭から口唇や鼻孔までの呼気の通路の形を変えるなどして音を作ること。  
一般的には発音と呼ばれる。

注2 絵画語彙検査…理解している言葉がどれくらいあるかを評価する検査

注3 構音検査・類似運動検査…構音の誤りの有無を判定診断する検査